

2025.6.29.

「人間の創造」

旧約 創世記 1章26－2章3節

新約 ヨハネの手紙一 4章7－12節

1. はじめに

6月最後の主の日ですので、旧約から御言葉を受けます。今朝与えられております御言葉は、創世記1章26節以下です。ここには、神様が「光りあれ」と告げられて始められました天地創造の最後、六日目に神様は「家畜・這うもの、地の獣」などが造られまして、その最後に人間が造られたことが記されております。天地創造について記されている中で、この人間についての創造の部分が、他のところに比べて圧倒的に分量が多くなっています。この箇所はキリスト教において、人間とは何かということを論じる場合、必ず引用される聖書箇所の一つです。聖書における「人間論」の中心的な聖書箇所です。その人間論に入る前に、大切なことを一つ確認しておきたいと思います。それは、聖書は「人間は神様に造られた」と記しているということです。このことが様々な人間論を語る前に、何より重大な点です。

2. 人間は神様に創造された

神様は第一日目に「光」を造り、二日目に「天を造り、水を天の上と天の下に分け」られました。三日目には「陸と海」と「草と木」を造られました。四日目には「太陽と月」そして「昼と夜」を造られました。五日目に「魚と鳥」それに「海の怪物」を造られました。そして、6日目に「家畜、這うもの、地の獣」を造り、その最後に神様は人間を造ったと聖書は告げています。前回、5月の最後の主の日に創世記1章の1節から25節の御言葉を受け時にも申しましたが、聖書は宇宙の歴史、宇宙物理学や地球物理学の本ではありませんから、宇宙や世界がこの順番で、たった6日間で神様はこの世界の全てを造られたということが大切なポイントではありません。そういうことは、地球物理学なり、生物学なりが研究することです。ここで聖書が告げていることは、「神様がこの世界の全てを造られた」ということです。そして、ここから今朝与えられている御言葉において大切な所なのですが、その神様によって造られたものの中には人間も含まれているということです。どういうことかと申しますと、「この世界を造られた神様がおられる」ということは人は認めるかもしれませんが、しかし、その神様は「人間をも造った」、つまり「神様は自分をも造った」、「自分は神様に造られたものだ」ということは、中々人は認められないものです。しかし、この「自分は神様に造られたものである」ということを認めるということが、この天地創造の物語において、聖書が私共に教えていることです。

「自分は神様に造られた」或いは「神様は自分を造られた」という認識は、実に深い智慧です。人間は普通に生活しているだけならば、決してこのような深い智慧にたどり着くことは無いでしょう。神様はこの世界の全てを造られた。その自然の中に自分もあり、自分は神様に造られたものだ。

この自己認識こそ、聖書が告げる人間が最初に知らなければならない最も重大な、そして深い智慧であり、正しい自己認識だということです。「人間は自然の一部である」という認識は、何も日本文化の専売特許ではありません。神様は世界にあるすべて、つまり自然界の全てを造られ、そして人間をも造られた。このことを知る時、人間は初めて人間の限界、人間の位置というものの学びます。それは神様に造られた「被造物にすぎない」ということです。自然の一部であるということは、キリスト教の言葉で言えば、被造物であるということになります。この自己認識が、人間に「謙遜」というものを教えます。放っておけば、人間は「自分が一番」と考えてしまう生き物です。自分が世界の中心であるかのように思い上がってしまいます。自分の都合でしか物事を見ませんし、考えません。しかし、「自分は神様に造られたものだ」ということをハッキリ弁えるならば、この「自分が一番」という驕り、高ぶり、傲慢、我が儘、身勝手さというものから、私共は自由になる道が開かれてまいります。

3. 神様に似た者として

では、人間はどのようなものとして神様に造られたのでしょうか。26節「**我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。**」とあり、27節には「**神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。**」とあります。余談ですが、26節でどうして神様はお一人なのに「我々にかたどり、我々に似せて」と複数形なのか、と疑問に思う人がいるかもしれません。これには二つの説明の仕方があります。一つは「尊敬の複数形」です。つまり、神様は貴いお方なので複数形で現されている。という文法的な説明です。もう一つは、ここで神様は「父・子・聖霊」の三位一体の神様に似た者として造られたので複数形となっている、という説明です。どちらでも良いと思います。大切なことは、人間は「神様に似た者として」「神様をかたどって」造られたということです。では、私共の何が、どこが神様に似ているのか、どこが神様にかたどられたと言えるのでしょうか？

古代教会から現代に至るまで、様々なことが論じられてきました。皆さんは、人間のどこが神様に似ていると思われますか？幼稚園の子どもならば、手があって、足があって、目や口があってというように、外見から考えるでしょう。しかし、さすがに大人はその様な所からは考えません。幾つか挙げてみましょう。

第一に、創造力がある。人間は様々な物を創意工夫して造り出します。それは、言葉でこの世界を造られた神様とやり方は違いますけれど、神様に似ていると言えます。人間は様々な道具を作り、それをを用いて物を作り出します。パソコンやスマホが当たり前になって、誰もが車を運転します。こんなことが出来るのは人間だけです。これは良い面だけではなくて、原爆のようなものさえ作ってしまうという面もあります。また、色々な美味しい料理も作りますし、綺麗な服やアクセサリも作ります。私たちの周りには、自然そのものよりも、人間が加工し、作り出したものに溢れています。

第二に、言葉を使うことが出来る。つまり、コミュニケーション能力がある。確かに、神様は言

葉で世界を造りましたし、アブラハムと契約したり、モーセを通して十戒を与えたり、預言者を通して言葉によって御心を御心を示されました。そして、神様は私共に聖書を与えてくださいました。多くの動物も単純な言葉は持っているとは最近では考えられているようだけれど、複雑なことを表現する言葉を持っているのは人間だけです。更に文字を使って、自分の考えや思いを遠くの人や、たくさんの人に、また時代を超えても伝えることが出来ます。

第三にルールや法律を作り、社会を作ります。蟻にも社会があるようですが、このような複雑な社会を作り、それを運営することが出来るのは人間だけです。刑務所を持っているのは人間社会だけです。

このようなものを上げていけばきりが無いのですけれど、私共が持っている様々な能力の多くは、人間だけに与えられたものです。

しかし、ここで考えておかなければならないことは、そのような様々な能力を神様は何のために与えられたのかということです。この点がとても大切です。これが抜けてしまうと、人はその能力を正しく用いることが出来なくなってしまいます。この点において私共にハッキリ教えてくれるのが先ほどお読みしましたヨハネの手紙です。4：7には「**愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。**」とあり、「**神は愛だからです。**」とあり、11節には「**愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。**」とあります。つまり、神様が愛なのですから、私たちも互いに愛し合うべきですと告げます。これが、私共が神様に似た者として造られた、神様にかたどって造られた理由であり、目的です。ですから27節で「**神にかたどって創造された。男と女に創造された。**」と告げられているわけです。神様に男と女の神様がいらっしゃるわけがありません。

「父・子・聖霊」の三位一体の神様、そこには永遠の愛の交わりがあります。その永遠の愛の交わりを持つ三位一体の神様をかたどって、神様は人間を造られた。だから、男と女に造られたわけです。それは男と女の間に、愛の交わりが形作られていくようにと神様は人間を造られたということです。

人間は誰一人同じ人はいません。背丈も違えば、性格も、能力も、性別も違います。しかし、神様はその与えられた能力の全てを使って、互いに違う者同士が愛し合う、愛の交わりを造る。その為に人間は造られたということです。様々な創意工夫をする能力も、音楽を奏でる能力も、コミュニケーションの能力も、全ては愛の交わりを形作っていくために与えられたものだということです。しかし、その能力を自分が得するためにしか用いようとしない、そのように用いることしか知らない、そこに罪があります。この罪の問題については、7月の最後の主の日に御言葉を受けます。

4. 管理者として

さて、そのように創られた人間ですが、聖書は28節で「**産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。**」と告げられました。この神様の祝福のもと、人間は「産み、増え」この地球上に満ちました。神様が他の被造物との関係で人間に求められたことは「地を従わせる」ことであり「生き物全てを支配」することでした。この言葉は

20世紀の後半から、とても評判の悪い言葉となりました。しかし、私はそれはこの言葉を誤って読んだ結果だと思っています。この「地を従わせる」とか「生き物全てを支配する」というのは、「悪い王様が召使いたちに対して傍若無人に振る舞うように、人間は自然や動物などに対してどんなことをしても良い、意のままに勝手に扱って良い」という意味ではありません。聖書がここで人間に求めていることは、言うなれば「適切に管理する」ということです。自分の欲に引きずられて、自然に対してどんなことをしても良いという意味では全くありません。その様に受け取ると、自然破壊や動物を絶滅させることだって、神様が許している赦しているのだから何が悪いのだということになり、自分が得をすることだけ、つまり何よりも経済を優先した結果、公害や自然破壊が引き起こされてしまいました。その原因は、このような自然との関係を容認することを聖書が告げているからだと言うわけです。しかし、これは誤読です。聖書は、この自然を造られたのは神様であって、この自然、この世界を支配する王はただ神様しかおられません。人間が王になることなど、断じて許されません。人間の役割は、ただ独りの王である神様の御心に従って、この世界を適切に管理することです。それ以上の権限は、人間には与えられていません。そのことをしっかりと、肝に銘じておかなければなりません。

5. 極めて良かった

31節を見ますと、「**神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。**」とあります。それまで、聖書は神様が創造をされる度に「**神はこれを見て、良しとされた。**」と繰り返し記してきました。しかし、全ての創造が終わった時、つまり人間を作り終えて、神様は「見よ、それは極めて良かった。」と言われました。ご自分が造られた全てのものをご覧になって、特に人間を見て、「最高だ。」と言われたということです。自然の中には、人間の目には変な格好をした動物や、何のためにあるのか分からないものもたくさんあります。しかし、それらも神様から見れば「最高の出来」「最高傑作」というべきものでした。自然に存在しているもの、そして私共一人一人、みんな神様の最高傑作なんです。「自分のどこが？」と思われる人もいるのでしょうか。自分を見たら、人は中々そうは思えないでしょう。自分のことになると様々な欠けが目につくことでしょう。姿形一つとっても、自分の姿を鏡で見て「神様の最高傑作」と言う人はまずいないでしょう。しかし、聖書は、神様は「極めて良かった」、「最高の出来だ」「最高傑作だ」と言われました。良いですか皆さん。私どもの本当の価値は、本当の姿はどこにあるのか。自分の価値を自分で判断したら、私共は完全に間違えます。人と比べることしか知らないからです。まして、他人からどう見られているのか、どう評価されているか。そんなものは、全くあてになりません。私どもの本当の価値、本当の姿は、神様の眼差しの中に映る自分です。それが私共の本当の姿であり、本当の価値です。そして、神様はそれを「極めて良かった」、「最高の出来だ」「最高傑作だ」と言われました。それが私共の本当の価値です。何とありがたいことでしょうか。

6. なぜ七日間なのか？

さて、神様はなぜ6日で世界を造られ、7日目に休まれたのでしょうか。聖書はこのことについては何も記していませんけれど、私はこう考えています。これは暦と深く関係しています。この7日間が一巡りとして、ユダヤの暦は作られことになりました。暦には月の運行に基づいた太陰暦と太陽の運行に基づいた太陽暦があります。この太陰暦と太陽暦の話をし出すとキリがありませんので、今は触れません。ただ、注意しなければならないのは、太陰暦や太陽暦が作られた時、月や太陽が神様と崇められ、時間というものはこの月や太陽の支配のもとにあると考えられていました。しかし聖書が告げているのは、天地創造の第四の日に神様は太陽と月を作ったということです。月も太陽も被造物であって、神様なんかではありません。太陰暦は一ヶ月を29日か30日、太陽暦は一ヶ月を30日か31日とします。これはどちらも10日を一巡りとしていました。日本語の上旬・中旬・下旬という言い方はそり名残です。そのようにするのが普通の感覚です。10というのは扱いやすいからです。ところが、一巡りを7日ですると、とてもややこしいことになります。皆さんがかけ算の九九を覚えた時、最後まで中々覚えられなかったのは7の段ではなかったですか？7の段は二の段や五の段のように、20とか30といった切れの良い数字にはなりません。ややこしい数字、扱いにくい数字なんです。しかし、ここに神様の意図があるのではないかと私は考えています。七日で一巡りする暦は、毎月同じ日が同じ曜日になることはありません。この扱いにくさによって、この時間というものを支配しているのは神様御自身であることを私共に示す。それが、この七日で一巡りとなった理由ではないかと考えています。「この時を、暦を支配しているのは、月でも太陽でもない。この私だ。」そう神様は私共に告げておられるのではないのでしょうか。

7. 七日目に休まれた

さて、神様は6日間で全てを造り、完成され、7日目は全ての仕事を離れて休まりました。7日目とは、一週の最後の日です。つまり、土曜日に神様は休まれたわけです。十戒における第四の戒めはこうなっています。出エジプト記20章8～11節「**20:8 安息日を心に留め、これを聖別せよ。 20:9 六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、 20:10 七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。 20:11 六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。**」と告げられています。土曜日は、神様が休まれた日だから、私たちも仕事をしてはならないと言うのです。では、何をするのか。礼拝です。自分の生活のための仕事から離れて、神様に感謝して過ごす。それが安息日です。キリスト教においては、イエス様が復活されたことを記念して、週の初めの日（つまり日曜日）が安息日となりました。日本は明治6年1月1日から7日間で一巡りの太陽暦が採用されました。そして、日曜日が休みの日となりました。もし、神様が天地を造るのに12日かけて13日目に休んでいたなら、私たちが休めるのは13日に一度となっていたわけです。何が言いたいのかと申しますと、神様の天地創造の御業は7日目の安息（つまり休み）

まであってセットになっているということです。

私共は、この「休む」ということが苦手です。それは、日本人の文化に「休む」という概念がなかったからです。「盆と正月が来たように嬉しい」という言い方がありますがけれど、これは太陽暦が採用される明治6年まで、正確にはもっと後でしょうが普通の日本人は盆と正月しか休みはなかったからです。そして、今は休日と言えは文字通り休む日だと考えています。これはホリデイの訳を間違えたと思います。元々ホリデイというのは、ホーリーデイ：聖なる日です。聖書が告げるホリデイは「安息日」です。それは、神様によって与えられた命の恵みを覚え、これに感謝する日です。そして、聖書はその日には「いかなる仕事もしてはならない」と命じておられます。これに対して真面目な日本人は、「もったいない」と思うのでしょうか。みんなが休んでいる日にも仕事をした方が、少しでも稼げるのではないかと思ってしまうかもしれません。しかし、安息日というのは、そのような「自分の利益」を第一とする生き方から、私共が解放されるために、神様と共に生きるために、神様が定めてくださったものなのです。実にありがたいことです。主の日の礼拝は、実に神様の御前に憩うときです。

ただ私は、この「安息」、休みということについては、自戒を込めて話すしかありません。私共の世代の牧師は、休むということを知らない人が多いのです。牧師はいつ休むのか？これは中々問題ですが、一応は月曜日ということになっています。もっとも、月曜日は牧師の休みの日なので、日程調整がしやすいということで牧師の会議が入ります。これでは休みようがありません。しかし、これを当たり前のようにして来ました。良くないですね。きっと、もっと若い牧師達はきちんと休めるような心の習慣が持てるようになるのでしょう。

いずれにしても、神様の創造の御業は、安息を含めてパッケージになっていたということです。私共も、休むということの大切な意味を受け取り直したいと思います。最近「ホリスティック」という言葉を耳にするようになりました。「全体的な」と訳せば良いのでしょうか。安息日の休みは、全体的な休み、ホリスティックな休みの日です。肉体の休み、心の休み、霊的な休み全てを含みます。私共が神様に造られた者として健やかに歩んで行くために、神様が備えてくださった必要な休みということです。そして、この日私共は御国における永遠の安息に眼差しを向けるわけです。今日一日、しっかり休んで、また新しい一週へと歩み出してまいりましょう。

お祈りします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、御言葉を通して、私共があなた様に造っていただいた最高傑作であることを教えてくださいました。ありがとうございます。あなた様の御心に適うように、愛の交わりを形作っていく者として、私共を強め、励まし、支えてください。私共が、自分の目から見て、欠けに満ちていようと、聖霊なる神様が余りある恵みをもって、その時々に対応しい御言葉を与え、出来事を起こし、道を開いてくださいますことを信じます。御国への健やかな歩みをお支えください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

